

本事業は、中央共同募金会の「居場所を失った人への緊急活動応援助成 第9回助成」の助成を受け実施しました。



居場所を失った人への
緊急活動応援助成

様々な理由で親や家族を頼ることが難しい若者
に対し、安心して暮らすことのできる暮らしを
提供するとともに、その実践や当事者や関係者
のヒアリング通じて、若者期の「親の役割」を具
体化し、「親の機能をどう社会化（仕組化）」する
べきか提言するための事業

報告書

発行：特定非営利活動法人コミュニティワーク研究実践センター

目次

1.	事業について	2
2.	実施内容について	3
3.	座談会	
	（1）親座談会	8
	（2）高校関係者向け座談会	13
	（3）大学関係者向け座談会	18
4.	報告会の開催	29
5.	提言	31

1.事業について

(1) 背景

2022 年度・2023 年度、赤い羽根福祉基金（以下、「基金事業」と呼ぶ）の助成を受け、孤立している若者、困難を抱えている若者に対し一人暮らし体験の場を提供すると共に、その実践を通して、一人暮らしに必要な能力と若者特有の難しさを明らかにするための活動を実施。024 年 2 月 27 日に基金事業の報告会を実施した。その中で、親に頼ることが難しい若者の支援が政策化されてきているが、親の経済的な支えに焦点が当たり、10 代・20 代の若者が独り立ちするための「親」の担う役割とは？何なのかについて具体化されていない。（少なくとも、親の役割は経済的な支援だけではないと考えている）そのため、若者期の家族や親の役割について明確にし、それを社会化（仕組化）する必要があることを提言した。また、基金事業の中では、親からの DV や金銭搾取など家族関係に問題を抱え、自宅から緊急的に避難してきた若者も多くいた。（15 名中 10 名）

(2) 基金事業から見出した新たな課題

- ①子ども期から続く親・家族等から暴力・暴言などに耐え切れなくなり、自宅を飛び出し、繁華街や友人宅を転々とし、その後相談につながる若者が多かった。
- ②家族関係が悪く、親を頼ることが難しい若者も多いが、「親」の役割について明確にされていない。

(3) 事業の目的

- ①（2）—①の解決に向けて、親や同居する家族等からの DV や金銭搾取などにより自宅から避難した若者が、安心して暮らすことできる居室を設置する。また、親に頼ることなく、自立ができるよう支援を行う。（ユースサポートハウス）
- ②（2）—②の解決に向けて、利用した若者への関りの中で、「親」的な関りや「親」にしか難しいこと、親を頼れないことで難しくなっている課題等を明らかにする。
- ③（2）—②の解決に向けて、若者、学校教諭、支援機関の支援者等から、若者期の「親」の役割や期待することについてヒアリングを実施。
- ④ ①～③の検証を行いながら、若者が自立するにあたっての「親」の役割を具体化し、「親の機能をどう社会化（仕組化）」するべきか提言を行う。

2. 実施内容

(1) ユースサポートハウス事業概要

○内容

①親や同居する家族等からのDVや金銭搾取などにより自宅から避難した若者が安心して暮らすことできる居室を2部屋設置。

②自身で自炊・清掃・入浴・金銭管理などについて、必要に応じて助言する。

また、一人暮らしに向けて事業費で負担した食材費や光熱水費、家賃等についても利用した若者に伝え一人暮らしを総合的に学ぶことができるようにする。

③未就労の若者に対して、段階に応じた就労支援（中間的就労を含む）を実施。

④利用開始時に課題を整理し、必要な行政手続きの援助や専門機関への相談、福祉サービスの活用など、本人に伴走しながら必要な援助を行う。

※学生については、学校に通い続けるための支援も想定。

⑤住まいを確保する際、入居に向けた支援や入居後の支援を不動産系居住支援法人や若者支援機関や生活困窮者支援機関等と連携し、実施する。

⑥支援実践の中で、支援員が感じた「親」的な関りや「親」にしか難しいこと、親を頼れないことで難しくなっていることを整理し検証会議に報告する。



○利用期間

2週間から概ね3カ月程度を想定しているが個々の状況に応じて柔軟に対応

○利用料金

- ・収入の無い方・収入の低い方（月 36,000 円未満）：無料
- ・収入のある方（月 36,000 円以上）：1日 300 円～ 1,500 円

※利用料には、家賃、光熱水費等を含む。

※収入とは、同居する家族・知人等の収入ではなく、あくまで本人。

※収入の 25%を目安として、30 で割った金額を1日の利用料とする。（100 円未満は切り捨て）

（2）ユースサポートハウス利用実績

○期間

2024 年 4 月 1 日～2025 年 2 月 29 日（終了予定は 2024 年 3 月末）

○対象年齢

16 歳～30 歳まで

○定員

2 名（途中 3 名に増員）

○利用人数

9 名

利用した若者の多くは、家族関係を背景にした者が多く、学校在学中の若者も多かった。

【利用開始理由と職業】

	年齢	性別	利用開始時 状態	利用開始 理由
1	20 歳	女性	学生	家族関係による家出
2	20 歳	男性	無職	生活習慣の習得
3	19 歳	女性	学生	家族関係による避難
4	23 歳	男性	学生	家族関係による避難
5	21 歳	男性	無職	同居人が自宅を引き払う
6	18 歳	女性	就労中	ネグレクト
7	19 歳	女性	学生	家族関係による家出
8	25 歳	女性	無職	同居人との関係悪化
9	19 歳	女性	無職	交際相手からの DV

※避難：相談開始時は自宅で暮らしていたが、家族により避難が必要だった状態

※家出：相談開始時にはネットカフェや友人宅にいるなど住居を喪失していた状態

○障がいの有無について

	人数
無し	5 人
疑い	1 人
診断有り	3 人

○主な収入の状況

	利用開始時	利用終了時	現在の状況
無し	4 人	0 人	0 人
就労収入	1 人	2 人	3 人
貯金	1 人	1 人	0 人
奨学金 + アルバイト	2 人	2 人	2 人
生活保護	1 人	4 人	4 人

○ユースサポートハウス利用終了後の住まいの確保

	人数
民間賃貸住宅	4 人
生活支援付き住宅	2 人
実家へ戻る	1 人
現在利用中	2 人

○利用宿泊数

809 泊

就労中・無職ともに大きな差は無いが、学生の場合、学業もあるため、生活保護の活用や就労による経済的自立も難しいため、利用日数が多くなっている。

	平均利用日数
就労中	31 日
学生	158 日
無職	36 日

（２）検証会議

○開催目的

ユースサポートハウス事業の実践の検証と助言、支援員が感じた親的な関りや「親」にしか難しいこと、親を頼れないことで難しくなっていることについての検証し、若者が自立するにあたっての「親」の役割を具体化し、「親の機能をどう仕組化」するべきか、提言を行う。

○検証会議委員

座長：札幌国際大学短期大学部准教授 山内 太郎 氏

委員：札幌地域若者サポートステーション 山名 徹 氏

札幌市ホームレス相談支援センター 山中 啓史 氏

NPO 法人 CAN 屋代 通子氏

○期間

2024 年 5 月～2025 年 3 月

○開催日

第 1 回：2024 年 5 月 13 日 18:30～20:30

第 2 回：2024 年 8 月 26 日 18:30～20:30

第 3 回：2024 年 10 月 1 日 18:30～20:30

第 4 回：2024 年 11 月 19 日 18:30～20:30

第 5 回：2025 年 1 月 14 日 18:30～20:30

第 6 回：2025 年 3 月 18 日 18:30～20:30

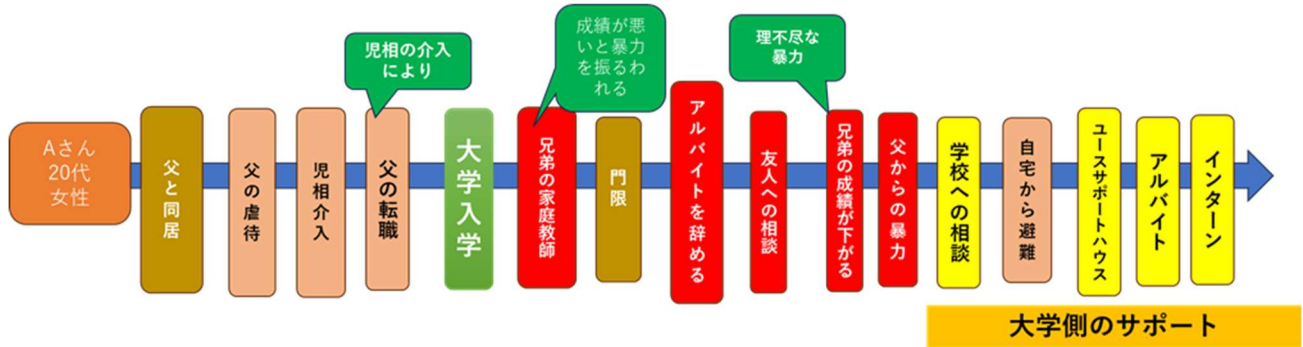


○議論概要

検証会議の中では、ユースサポートハウスの実践事例について報告や助言、若者期の「親の役割」とその機能をどう仕組化するべきかについて議論された。

当初は、若者視点での親の役割について明らかにする方向で考えていたが、議論の中で、若者自身ではなく、「若者期を支える親側の視点」で考える「親の役割」や若者期を高校や大学などの「学校や社会」が「親の役割」をどう考えているのか？何を期待しているのか？について、明らかにする方向で議論が進んだ。結果、親向け座談会・高校関係者向け座談会、大学関係者向け座談会を開催し、若者期における「親の役割」とその機能をどう仕組化するべきか本報告書にまとめた。

(3) 利用した若者のライフチャート

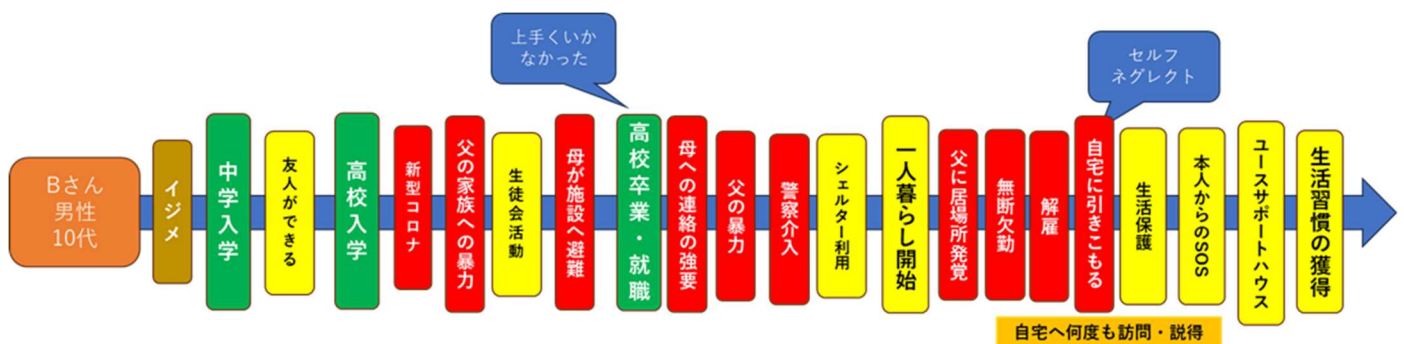


【背景】

小学1年生の時に、今の父と住みはじめた。(後日、実父とわかる) 同居後、父からしつけと言われ暴力をふるわれるようになった。弟が小学生の時、ケガをして児童相談所が介入。父に指導をしたようだが、変わらなかった。大学に入ると、妹の私立中学受験に向けた勉強をみるよう言われ、門限を決められた(18時)。模試の結果が悪い時・中学受験失敗時にも暴力を振るわれ、その後も変わらなかった。大学の教諭に相談。暴力が常態化していることから避難するよう言われ、1泊過ごし、大学教諭の紹介で、ユースサポートをハウス利用。

【利用開始後】

大学の紹介で、アルバイトに従事。奨学金の変更等も大学の協力もありスムーズに進んだ。住民票の閲覧制限や扶養を抜く手続きなどが、スタッフが助言・援助しながら進めた。大学に親から本人宛に連絡があり、当面の期間、連絡を取らないことを確認。お金も貯まり、大学の協力もあり住まいを決めた。



【背景】

高校生の頃、母親が父親から暴力を受け、身体に障害を抱えた。高校卒業後、大手企業に就職。母は離婚しようとし、父がそれを阻止するよう本人に伝えたが、失敗。父から本人に暴力があり警察が介入。当法人のシェルターを利用し、支援付き住宅に入居。入居後、父から連絡があり、恐怖から、仕事に行けなくなり引きこもり、解雇となり、自宅に引きこもる。昼夜逆転した生活、部屋及び自身の身体の清潔保持等が難しくなり、生活習慣を改善すること、父から避難するため、ユースサポートハウスを利用。

【利用開始後】

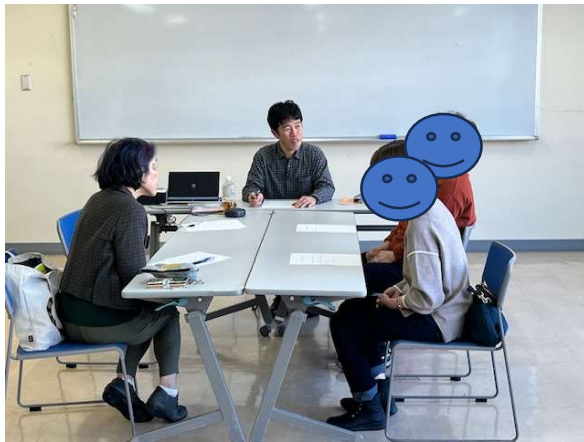
毎朝、声掛けを行いながら、スタッフが援助し、掃除・ゴミ捨て等を本人と実施。毎朝声掛けをすることで、昼夜逆転した生活は改善された。ユースサポートハウス利用後、以前暮らしていた地域と異なる場所の支援付き住宅に入居。入居後も、朝の声掛けや清潔保持等の見守りを実施。半年以上、髪を切ることあ出来ていなかったが髪を切り、入浴習慣等も身に付いた。少しずつではあるが、友人との交流も持ち始めている。

3、座談会

(1) 親座談会

開催日時：2024 年 11 月 19 日 13:00～14:30

参加者：2 名（子育てが終了した親）※当事者の親ではない



【内容】

（インタビュー）子供が 16 歳から 29 歳の期間で、子供との関わりで楽しかったな、とか苦労したな、というところがありますか。

（A）主人がいなかったので。頑張ってキャンプに連れていったり、お父さんの役目を（も）しました。今孫をキャンプにつれていったりすると、ママはねって当時の思い出を話していたりするので、よかったなと思って聞いています。

父親が普段いないというのを理由にして、子供たちにあまり経験させられないというのは（よくないという思いが）すごくありました。子供の喜ぶこととして、毎年キャンプを企画していました。

（B）我が家は全く逆で、インドアなので、キャンプはいいよ、行かないわ。外でバーベキューとか絶対嫌って感じで。だから子供たちと一緒に外で何か楽しむとかってというのはあんまりしたことが無くて。2 人とも子供の頃から音楽を習っていたんです。小学校、中学校、高校と夏になるとコンクールがあり、それに向けて夏休みは音楽漬けみたいな生活をずっとして。冬は学校でスキーがあって。自分で連れて行くわけではなくスキースクールに通わせていました。

（インタビュー）お 2 人ともご自身が若いころから経験していたことを、やっぱり子供たちにも味わわせたいということですかね。

（A）まずは自分が楽しむのが基本なのでね。自分が楽しめないことだったら多分続けられなかったかなと今になって思います。

（インタビュー）お話いただける範囲で構わないんですけど、苦労したなとか、これは大変だったな、みたいなことはありましたか。

（B）父の参観日みたいなのがあって、昔は土曜日とかにありましたが、（他の家庭の）お父さんはだいたい来ていました。だから（子供たちも）主人に八つ当たりもよくしましたし。

いつ帰ってくるんだとか、仕事なのではないんですけど。

主人が知らない間に幼稚園に入って幼稚園を卒業したって感じですね。3～5 歳っていっぱい変わる女の子がかわいい時期に主人がそばにいなかったのは今でもやっぱりかわいそうだな、って。最近主人にもかわいそうだなって思います。

(A) これが凄い、大変でしたというのではないですが、上の子が高校受験のときにインフルエンザにかかってしまって。中学校の先生が父兄の控室が高校にあるはずだからとりあえず行って、お母さんは控室で待機してられるようだったら受けさせたほうがいいって。娘に聞いたら行くって。

主人がいないので、全部私が色々しなくちゃいけない。冬なのでタクシー呼んでもすぐには来ないし、車で連れていくにも駐車場ありませんって言われるし。

タクシー呼んで上の娘を高校の熱ある人たちの玄関のほうに行ったら、父兄の控室はありませんって言われて、そのままバスに乗って帰ったんです。

家に着いてからは、迎えに来てください、って電話が来るかなってドキドキしながら待ってたことだけは覚えています。

(インタビュー) 子供たちに配慮していたこととか、こういう距離感で行こうみたいな考えはありましたか。

(B) お姉ちゃんが私立に行ったので、ちょっと額面がかかりましたね。下の子は見えて、自分はしっかり公立に行かなきゃって感じでした。やっぱり二番目だからしっかりしているのか、よく見ているなと思いました。

(A) なるべく誘導はしないようにしよう。親の希望はありましたが、結局口は出しましたけど、なるべくしたくないなって。最終的に本人がそこに決めたらそのまま応援するっていう感じで。

(インタビュー) 子供が成長し、子育てが一旦落ち着いたって思うタイミングはどこですか。

(B) 上の子はもう結婚しています。同棲したいって言ってきたときかな。終わったのかなって。自分で家庭を作りたいということなので。

(A) まだまだ一区切りだと感じたことは無いです。上の子が大学卒業した時点で働くっていう話でしたが、コロナの時期で、1 年間学校にも行けず。資格を取って。そのまま就職するかと思ったら、研究室に 2 年通って就職しました。元気に帰ってくればいいなって思っているところです。下の子はまだまだ学生なので（子育て中という意識です）。

(インタビュー) 子育て中、あるいは今振り返って、なんかこういう仕組みがあれば、制度があったら助かったな、とかありますか。

(B) 子供が小さいとき、主人がいませんでした。学校とか幼稚園の役員をしていて。その時に会合とかをすとか、飲み会をしましょうというときに子供をちょっと預ける場所が欲しいなと思いました。

実家の母はあまりあてにできないなと思って、行政に相談したことがありました。噂で子供を預かれますよっていう施設があると聞いて。でもよくよく聞いたら、親と住めない子たち

の（ための施設の）空き部屋で、2時間預かりますよっていうところだった。やめたほうがいいですよってすごく言われて、結局やめましたね。

公的なところでも、ちょっと手軽に、有料でも1時間1000円とかで預かってくれる保育園的なものがあればいいのですが、小学生を預かってくれるところは意外に少なくてですね。ちょっと大きめの子供を預かってくれるところがあったらいいなあって思いました。

（インタビュー）中学生や高校生の時にこういうのが、あればっていうのはありましたか。

（B）留守番できる歳になったら置いていったりもしましたけど。私はなるべく近所の方をお願いしたりして。実家だとかえって迎えに行くのが面倒で。

（A）実家が近いので、何かあった時は頼んでいたんで、他に預けるところがあったらな、というのはあまり思ったことがありませんでした。自分自身、子供を置いて出かけるというのができない性格だったんで。我慢してというのではなく、なんとなくできなかったです。

（インタビュー）実家がもし無かったらどうなっていたと思いますか。

（A）近所に住んでいる子供のお友達のお母さんをお願いするしかなかったと思います。

（B）同年代の子供がいるとお互いわかっているんで。小学校低学年のときのお母さんたちのネットワークが結構後々まで続くと思いますね。高学年になってくると働きに出るお母さんも増えますが、昔から知っている人はわかるので。あれこれ相談したりはします。

（インタビュー）低学年時代のお母さんネットワークみたいなものに、参加出来ないお母さんがいたりしましたか？

（A）子育てネットワークに乗り切れていない方は多分顔を出されていないので、あまり印象が無いですね。そもそも、普段から顔を出されてないから。

（B）私は役員をされていて学校に行かざるを得ないので、お母さん方の顔を覚えたりするのは早いんですね。それでも、顔も見たことが無い方はいらっしゃいます。

（インタビュー）20代を超えたお子さんたちとの関係はどういうふうにとらえていますか。

（A）大人同士なので、子供ですけど、大人扱いをしようと思っています。手を出したくなったりはしますが、やりすぎないように思いながら接しています。

（インタビュー）子供との接し方については旦那さんとも話をしたりしますか。

（A）旦那とはしないです。主人はもともとクールな感じなので、子供に対してのめりこむことはないですね。私のほうがどんどん聞いちゃうほうなので、なるべくそれを大人になったのでしないようにと思っています。

（B）なんかそういう子育て感みたいなのがどこから来たのかなって。例えば大人だから距離を置いて話したほうがいいよね！みたいな。

私の両親は特に過保護なんです。雨降ったら濡れるから車で送ってあげるとか。

そういうのがあり、過保護にしたいタイプなのは自覚していますが、自制しています。

(インタビュー) 子供さんとの関係という中で、過保護っていう言葉が 2 人から出たのがすごく面白いと思います。親や家族に頼れない若者たちについてはどう思いますか。

(A) この問題を、聞くまでわからなかったです。あまりニュースでも取り上げられないですよ。

(B) ヤングケアラーは、娘がたまたま連れてきたお友達が、うちのお母さん寝たきりなの、というようなことを言っていて驚きました。頼れないのは経済的なことばかりだと思っていたら、そうではないと聞き、ショックというか驚きました。最後の砦じゃないですけど、親に相談したらなんとかなるというか、解決しないまでも自分の気持ちがなんとかなるか。そういうところが結構大事だと思うので、そういう支えがあったら少しはいいかなって。親、家族に頼れないってなったときに、相談するとか、悩みを打ち明ける場所がどこかにあったら、自分の中で折り合い付けられるようになるのかなと。相談できる場所や具体的にアドバイスしてくれる人が必要だと思います。

(A) 闇バイトとかがすごく大きく取り上げられて、あと高齢者の問題ばかりなので。これから動かしていく若い子たちにこういうことがあるっていうのは本当にびっくりしました。親に頼れないってどうするのだろうなって。

(インタビュー) 幸せな家庭があって、そこに子供が育ってというのがあるべき、いいものなのかなっていう考えがあったりはしますか。

(B) 当たり前という考えがありましたが、実は当たり前ほど難しいっていうのが。大学のときに、学費が払えないからアルバイトをするとか、かわいそうですよね。うちの娘が大学の時、奨学金受ける方が急増して。奨学金受けるか考えたこともありました。実際は借金ですからね。親が年取ったら肩代わりもできません。娘の友達が、推薦入学で大学進学決まったって、喜んでた子がいましたが親御さんの経済的な問題で行けなくなってしまいました。学校の推薦だから学校にも迷惑がかかるし。本人も行けないし、周りもワーってなったことがあります。学校の先生は経済的な部分とか具体的におっしゃってなかったのかなって。親御さんは 4 年間これだけかかるっていう見通しがたてられなかったのかなって。

(インタビュー) 家庭内の経済事情みたいなのは先生にも相談したほうがいいと。

(B) 本人が相談したいと思ったときにはするんでしょうけど、先生のほうからはもちろんね、言えないことだと思います。

(A) 子供の高校が、道外の大学を薦める学校で、二年目のときに、道外の大学にいけますよって言われましたが、経済状況を考えて、学費も出して生活費も全部送ってというのはまず無理で、バイトもしてもらわなくちゃいけない、大学に行くんだったら道内にして欲しいと本人に言っていますと学校の先生にしたことがあります。

(インタビュー) 最後に、親としてお子さんにどんなことを期待していますか。

(B) 期待なんかしていません。自分の面倒を見てもらうとかは一切考えていません。行き来できる距離にいるというのが幸せだと思います。あまりして欲しいことは無いですね。自分はやることはすべてやってきました。ちょっと過保護的なところがありますが。動けるうちは迷惑かけないようにしないっていうのはありますね。

(A) 何かして欲しいみたいなことは期待してないです。ただ、自分で生きていって欲しいなって。もちろん頼ってもらってもいいし、頼ってくれることを期待したりもしてますけど、とりあえず自分で稼いで、自分で生活して、自分の一生を生きて行って欲しいなと思って。最終的にね、いろいろあるんだろうけど平穏無事にやってほしいなって思います。

（２）高校関係者向け座談会

開催日時：2024 年 11 月 26 日 19:00～20:20

参加者：4 名（高校教諭）



内容

最初の十年間は生徒指導がシリアスな高校にしばらくいましたので、それこそ家庭訪問で驚く。ああなるほど、こんなところで暮らしていたのかと。毎日、生徒指導事項が起きるような学校で、家庭訪問行った中で一軒家だったのは一回しかなくて、だいたい賃貸アパートでした。玄関に入ったら茶の間とキッチンともう一間あるのかどうかという部屋でした。部屋が雑然としている、汚れている家も多く、手が回っていないんだろうなっていうこともありました。こういうところにいると（家庭環境）、悪いことしたくなるのかなって思うことがありました。

今度は進学校にきて。先ほど生徒も変わってきたっていう話を始まる前にされていましたが、生徒も親も変わってきているかなっていうのを感じます。

最近は生徒よりも親に腹立つことが多くて。生徒が泣きながらいろいろ話してくるのを聞いたら、「親がおかしくね？」っていうことが結構あります。

家族関係や経済的な問題を抱えている生徒の対策や情報共有の取り組みについてなにかありますか？

そういう子たちの学校適応とかを考える相談部署があります。ただ、機能しているのかと言ったらあまりしていない。休みが多い生徒の報告はされ、欠席が多く進級認定できませんっていうのを大目に見て3割までどうにかしましょうとか、卒業に関わる数字的な部分についてで背景をなんとかしましょうっていう風にはなってないです。

多くの先生方は自分が担任されている子供たちの中になかなかしんどいっていう人っているのは知っているが、そこは学校がなんとかすることだとは思っていないはずです。研修の機会もなくて、自分で研修を見つけて、参加していれば別だと思いますが。

何か起こったときは、学校にできることとして限度があるよね、みたいな感じでお話もありましたが、教育相談的なものは、本当に機能しているかという正直そこまですでもないかな。児相とかが入ってきたりするとそれに対しては、管理職も含めて対応したりはします。命にかかわるようなところ、自殺まではいかないですけど、そういうような、ちょっと危ない動きがあるような子たちはちょっと気にかかけたりします。そこまでにしないと、みんなでなんとかしようっていう感じでは正直ないかな。

学校の体制はどうなっているかと言うと、教育相談部があって、スクールカウンセラーについてはかなり助かっています。 カウンセリングですから、アクションするというよりは受け止め続けて、認知のゆがみがあれば、なんとかしていくなどはします。 アクションを起こすっていうところにはなかなかすぐには行っていないです。 シリアスなケースでは担任と感触まで共有するっていうのがあります。 特に共有されているのは自殺リスクがある場合。 うつ（の生徒）が結構いて。うつ病に関しては専門医にかかってもらいたい。それがかなわない場合は命の危険があります。 遠距離で通学している生徒とかは、地下鉄はまだ柵がありますが、JRだと飛び込んだらおしまいだなって思ったりもします。 保護者には生徒は、今こういう状況にあって、学校では、こんな様子なのだという話をします。理解のある保護者の場合はわかってくれますが、ただ、生徒がうつになっている原因がまさに親であったりします。 担任としてはとにかく最悪を想定しています。学校でできることは、ここまでかなっていうところとの狭間を生きているって感じです。 長くいると、この子頼むねっていうのがあります。この子も？この子もですか？というのが、僕のところには結構あります。
保健室でアンテナ（の役割を）はっていただいているので、生徒の 10%くらいは集まって来るので、そこから一般の教員も情報を頂いて動くというような感じですね。 情報交換会を年七回やって、そこで情報を共有します。生活上の支援が必要なケースは特別支援コーディネーターが、外部支援が絶対必要だねっていう（判断をした）ときには、サポステさんをはじめ各機関に色々と動いていただくこともあります。
サポステなどの外部機関に繋げるっていうのは、結構個人技ですね。学校としてサポステと繋げてというのは難しい。小さい職場なので、組織でやるというよりは、個人でやるっていうケースがやっぱり多くなります。
全日制の大きな学校だとそうならないケースもあります。その先生が抜けたら。ぽこって穴が開くっていうようなことはよくあるかな。
大きい学校だと機動力が無いとかそういうのが遅いですよね。
高校側としては、民間団体との連携は難しいかもしれないです。児相があまりにも気軽に利用しにくい場所なので、児相までは至らないけども、今、緊急避難的に家から離したいというケースはよくあります。
それこそ親子関係が悪いっていうケースがすごく多いです。特にどこの馬の骨なのかわからない民間団体に生徒を預けるなどということは、学校としては推奨できませんという立場にはなりやすい。だから管理職とか担任とかと共有して話を通していこうと思ったら、途中でストップがかかることや時間がかかっちゃうこともある。
保護者の了解っていうのは絶対条件ですね。家族がむしろ原因であると。本人との関係がやっぱり悪化している中でとなると、どういうタイミングで伝えればいいのか悩みます。僕の職場もよくあるんですよね。学校に、全然来てませんっていうのが。それは家族関係が問題で、欠席状況がぎりぎりになって、親に伝える必要があるんじゃないかという場合があります。多くの教員が事情を知らないというか、家族にはちゃんと知ってもらおうという話になりますが、それを知られるとすごくシビアな状態が生まれてしまうから。結構大変だったりします。
（質問） やっぱり家族の位置というか、学校の中での親御さんの了解（が必要だということ）って、考え方としては一般的なんだろうなと思うんですけど、そういうむしろ家族関係が難しく対応に困った

っていう話がありましたけど、皆さんでもそういう事例とかありますか？
欠席状況とかが絡んでくると、もう２時間で単位認定できませんっていう連絡を、保護者にしなきゃならないというときに、担任の先生がそれをします。その時にどういう言い方だと本人に被害が及ばないかについては相談することはあります。学校には来ていて、親のひどさを愚痴るみたいなときには、あなたに被害が及ばないようにうまいこと言うよって。100%保証はできないけど、少なくとも家に帰って殴られない程度にみたいなのは。家庭ではしんどい思いしているから、せめて学校ではしんどさがちょっと和らぐような声かけとかしようかということは共有したりしますけど。
保護者には成績のこととか、出欠のこととか、進路や進級に関わる部分に関しては伝えています。
若いころはそういう塩梅がわからなくて、やんちゃな生徒がいたらその生徒のことを考える余裕がなくて、あんまり考えることなしに伝えてしまったりして、生徒との関係を失敗したので。歳をくってきて、親が言っているのと本人が言っているのが、どっちが正しいんだろうかって、聞いてみないとわかんないなっていうことがわかってきました。生徒たちも子供なのでどこかでボロが出て、今回は生徒の方が嘘だったのかなあとか。どうやら本当のことを言ってるらしいというのを、時間をかけて精査して、僕はこういう風に受け取ったんだけど合ってるかい？っていうのを確認しています。でも立場上、親に話さなきゃいけないことはあるので、これとこれは親に話さない。これは連絡するよって。そのまま伝えると大変なことになるっていう話は、本人と確認して、口裏を合わせておくということをしています。これは個人プレーというか、学校の中で共有されているものではなくて、先生のその時の対応で。担任がこういう風にやっているっていうことは、学年主任と共有して確認しないと場合によってはシリアスになります。管理職が話のわかる人だったら管理職にも共有して。前の担任の引継ぎと照らし合わせて、齟齬があったら確認してみたいなことをします。白黒ははっきりさせることも大事かもしれないけど、ケースバイケースです。親をうまく使うときもあるし、親が変わってくるときもある。その様子を見ながら波乗りするような感じですかね。家族の存在の影響の大きさというか、プラス面もありますね。物理的、経済的にも家族の存在に縛られているような。大きいなというふうに実感している。ただ、結局難しいまま卒業している生徒もいる。高校の段階で家族関係みたいなところを修復する、あるいは問題を把握するっていうような取り組みができないものなのかと。
家族の問題は学校だけだと無理だと思います。学校以外のコミュニティとその子が接する機会をあえて作って。本人は望まないことも多いけど、例えば全く環境の違う子供と接する場面がありそうというときに、支援機関の方たちのアプローチが非常に大事だと思います。学校だけのコミュニティで解決することは難しいと思うので。そういうダイアルとの接続を学校が生徒に情報を提供するか。連絡してみたらって提案することで解決するかもしれない。最近の例で言えばヤングケアラーですけど、その子たちって無自覚な状態でそれをやり続けている。親と生徒自身が共依存関係にあるので、なかなか気づかない。意識をするきっかけはやっぱ外部に求めたほうが良いし、早いと思います。学校の中だけで解決は無理な話で、外との接点を持つという意識は、学校では割とスタンダードです。ただ、外部の支援機関と繋がる、関係を構築するというのは、すべての教員ができていないわけではないです。一部の特別支援コーディネーターの方とか、養護教諭の方は繋がっているケースが多いと思いますが、全員がそれをできているとは決して言えない状態ですね。養護教諭に繋いでもらうことも多い。学校の体制としては脆弱で、特別支援に関する専門的力量を持っている先生はほとんどいないのが現状です。だからと言って必要ないかという必要で。学校は人が入れ替わるので。生徒の状況を見てヘルプが必要だと思ったときに、学校でできることには限界があ

ります。機関の一覧表があるだけでも違うと思います。信用できるところなのかどうなのかなってわからない人のほうが正直言って多いです。児相に言うと角が立つ。児相に連絡したら破綻するなっていうのも、いろいろ考えて困ってしまいます。職員一人一人の力量によって生徒の環境が左右されてしまうのは良くないと思います。学校っていう機関に対して、こういうサポートがあるといいですよっていうのを行政がちゃんと文書として共有してくれるといいかな。役所のほうからこういう情報があるよっていう風な示され方をするといい。
使いやすいですね、お墨付きがあれば。現場のことがわかってないから。現場で何が起きていて、教育相談的なことでどんなことに困っているのか、行政側が把握していない。不登校の数が増えているとか調査だけして、言い訳している。
本当の実態というか、そこを知りたいと思ったら、全部の学校っていうのは無理だけど、今日みたいな場の方が協力は得やすい。いかに学校が問題を把握していないかということも含めて実態として知ろうと思ったら、無作為というか全部の学校に送っていかに返答が返ってこないかっていうことを含めて出てくるとは思いますね。
家庭関係が悪いっていう理由でやめたっていう生徒はちょっとなんか具体的に思いつかないですね、最終的には経済的な理由かなって感じでやめた子はいますが。
経済的な理由で辞めたっていうふうになるけど、よく見ると家族関係もぐちゃぐちゃだったりします。でも主訴は経済的な理由だって最終的にはなります。
本人の学力不振とか就学意欲低下とか。
そっちで処理されるんだけど、やっぱりよく見ると家族関係もあります。
家族関係が悪い中で就学意欲なんか沸くわけない。
家族関係が問題で中退しますっていう理由で退学届には絶対書かないですね。家族関係っていう話でっていうのはない。記録には残らなくて。
生徒さんも家族関係が難しくなった時に、(聞き取れず) っていうのは教員の中でも意見が割れるのかな。家族関係を修復させないでどうするんだ、というような議論にしかない。年齢的にはもう自立する一歩手前ですから、修復しようっていうことでは先生方の中でも(意見が割れる)。むしろ逆に自立支援をいかにやっていくかというところの視点ですよ。
学校的にはどっちかという生徒指導が大変な学校で、日々それに追われてて、その家庭環境まで踏み込んでなんとかしようっていう余力が先生方には無いと思います。養護教諭の先生は多分いろんな情報を持っていて、手立てはあると思うんですけど、それに周りが乗っからないというか。そういう意味ではその辺はドライといえばドライなのかな。
公立で言うと、むしろ家族と早く離れたほうがいくなっていうようなケースのほうが私は多いです。ちょっと視点は変わっちゃいますけど、生活保護の方々のところから自立していく子供たちの大変さっていう問題が多かった。経済的には確かに支援は頂いているんです。生きてはいけるんですけども、精神的な自立っていうところが非常に大変です。働くことがすべてではないですけどね。精神的にも経済的にも自立していくっていうアプローチが描きにくいケースが多いです。
生活保護の子供たちの成長という点にすごく困難性を抱えているんです。自立がなかなかできてなくて、卒業していてもその後、壁にぶち当たるであろうというケースとかですね。
そこは非常に大きな問題で、焦点を当てざるを得ないのは経済的な困窮の中で過ごすという経験が考え方をいかにネガティブにするか。生徒たちもこういうことは聞いてくれないでしょうとか、お金が無いことによっていろいろな制約を受けて考え方がネガティブになっていく。卒業した後に、

仕事が長く続かなく、結果、家族だけで時間を過ごすとかしています。本当に学校だけでやることじゃないと思うんですけど、学校にもやれることはあって、全体として問題を開くということが必要なんだろうなというふうに思います。卒業した後に、シェルターに行くとかってというのはやっぱりあったりするのです。
コロナで一番危なかったのはステイホーム。家にいて快適な子はいいけど、家が地獄の子は大変でした。
子供の学力と世帯収入は相関するとか、安定の中であってもステイホームは危ないっていうのはありますね。
ステイホームが危ないのは、収入がある程度大きい、でもミリオネアじゃなくて、中途半端にお金がある。必ず息子は〇〇学部行くとから始まって、俺が〇〇大出たんだから、お前も〇〇大以上に行け、〇〇大以下は大学じゃないとか。おかしいんじゃないか？これっていうような、親がいて。どう頑張ったってこれ無理ですっていうのを本人が一番わかっているのに、頑張ればできるでしょって言われちゃう、この地獄。教育虐待っていうテーマでこの間話をしました。進路に関して親の道具にされているっていう。自分が実現できなかった夢をお前が実現するんだっていう最悪の子育てだったりするし。自分ができたんだからお前もできるだろうみたいな。自分の後を継げっていう。
若者の貧困っていう文脈で今日ちょっと話もあったんですけど、たぶんその後もずっとメンタル調子悪くてっていうのが。
幼少期の貧困の経験はある種、それも経験ですよ。やっぱり肯定感が全然育まれない状態だったりするのかなと思います。
経験の貧困とかも言われますね。本当にいろんな社会的な体験とか経験とか繋がるとかっていうことが少ないので、家族から離れたほうがいい子ほど家族の中に押し込められているとか。
そこから反発できる子はまだいいですよ。反発できないまま共依存関係でずっと行って、大学に入ったはいいけど社会人としてちゃんと育てないっていうケースが。
高校1年生の時、親子関係が理由で、家出したという生徒がいると、10個くらい若い担任が、深刻な顔してすごく騒ぎました。僕はいいんじゃないの？って思ったんですけど、その時はあまり何も言わないようにしてたんですよ。生徒がずいぶん悪い子ちゃんにされたんだなって思って。なんかあるんだろうって思ったら二年、三年でほらあったしょ、って。だから（家出に肯定的なのは）マイノリティだと（思います）。学校によります。進学校だと、教員も修羅場をくぐった教員はあまりなくてっていう場合も結構あるんですよ。
家出を促して、若い担任の先生に怒鳴られたことがあります。部活をやめたいって。でも親が話を全然聞いてくれなくて。親も顧問もやめさせてくれない。親は部活辞めたら非行に走るからやめたらダメだって。そういう傾向は、ちょっとはあったので、顧問の先生になんとかうちの息子を引っ張ってくださいみたいになって。顧問もわかりましたって。親と顧問が、部活をサボった日に二度と部活はサボりませんって約束させました。やりたくないんだったらもう絶対やらないって言いなって伝えましたが、（顧問や親に）聞いてもらえなかったらそれでいいでしょって。その日、家出をしました。そうしたらもう大騒ぎになって。僕らがどうやってここまで引っ張ってきたかわかってないじゃないですか、みたいな。非行を助長したんですよ！って。で、結局（彼は）辞めました。学校には最初に戻るんですが結局、辞めました。でも家族関係で辞めたっていう書類は無い。進路変更なんです。一身上の都合ですね。マイノリティですね。だいたいここに集まるってこと自体が特殊な人たちではありますけど。

(3) 大学関係者

開催日時：2024 年 12 月 10 日 19:00～20:40

参加者：3 名（大学教諭）



(インタビュー) こういう学生がいて、学校としてどんな対応をされているか、というところから入っていきたいと思います。学生対応の事例の話をお願いできますか。

(B) 一番対応に困ったのが、父親が手を上げる家。家に帰りたくないという学生で、金銭的には割と余裕がありましたが、帰ると痣ができ、顔に痣ができたときは転んだと言っていました。帰れなくなりました。友人の家を転々として、急に大学に来た時があつて。話は聞いたけどもどうしたらいいのかっていうことがありました。サポートセンターの方に相談しましたが、保護者の経済状態が良かったため、奨学金を取って家を出ることもできず、アルバイトをしながらだと、大学は続けられず、結局殴られないように父親と生活時間帯をずらして家に帰る生活をしました。本人の体調はボロボロの状態、補講やカバーアップっていうのも行うこともしました。卒業し、就職もできてこれで多分大丈夫だと思ったんですけど、この後、心を病んでしまい、しばらく連絡が取れなくなってしまったっていうケースが一番困りました。どうしてあげたらいいのかわからないし、どんな制度を使ってもどうにもならないってなったときには、どうしたらいいのだろう。家に余裕があったケースでもう一つは、遠くに実家があって、家賃が払えなくなって、親からの仕送りが止まって授業料だけは振り込まれているっていう状態です。本人から連絡しても親には連絡がつかなくなって、夜のお仕事を始めましたが、学校にほとんど通えなくなってしまいました。こちらも親御さんに連絡が取れないし、授業料は支払われているのでどうすることもできなくて。結局本人は夜間のアルバイトで、始発までの間、休憩室で仮眠をとるような生活をして、昼間、保健室で寝ているっていうようなこともあって。卒業はしましたが、就職活動する余裕もなくて。スーツとか買えるような状態ではなかったの。卒業してから、どうなったのとかはわからない。ぎりぎり続けられたのは、授業料は払ってもらえたからです。授業料の猶予は、ギリギリまで待ってくれますよね。その間に自分でお金を借りて、工面をしたって聞いてます。

(インタビュー) 家族は授業料と大学続ける部分の手当てはしているということですね。もちろん、いろいろな課題があるんですけども、例えば経済的なところで、親からの仕送りや学費の納入ができないような状態で卒業もできないような事例とかあったりしますか。

(A) 学費未納の学生さんは本学でも、年間何人か、いらっしゃいます。家庭がすべて親との関係が不調なのかって言ったら、決してそういうわけでもなく。もちろん不調のケースもありますし、不調じゃないケースもありますので、様々です。学費の苦労は親との関係に関係なく苦労されているケースは散見されるかなと思います。

(インタビュー) 家族関係とは別で、経済的な部分で親自身がそういう風にできないという場合もあるんですか。

(A) 奨学金を親御さん側の生活費にまわさざるを得ない状況で、学費が未納になってしまうということもありますね。

(B) そのようなケースは、結構数もあり、最後の顔合わせでわかって、学科長と担当だけ情報が入るので、知ってる先生もいれば、知らない先生もたくさんいるというのは温度差を感じることが少なくないですね。

(A) センシティブな情報だっているのもあるので、対応が難しいというのもあります。

(インタビュー) 学校側で手立てがあったりしますか。

(A) 学費系はごめんなさい。僕が直接対応したことは無いので、学生部の先生方に繋いで、そちらで個別面談してっていうようなところまでしか僕はわかりませんね、

(C) うちの学生支援の体制がかなりできている大学なので、大学の相談の窓口に行って、大学が組織的に対応している学生が一定数います。学生の面倒をきちっとみるという意識の教員が多いので、ゼミの先生ごとに抱えているケースというのもそれなりの数あります。場合によっては、サポートセンターとゼミ担任が協力して対応するという形にして、ある程度枠組みがあり、システム的にはできていますが、それですべての問題に対応できるかというと、そうでもないという状況です。事務方が非常に学生に寄り添って仕事をしてくださる。学生たちはサポートセンターとゼミ担任と同じくらいの割合で事務に相談します。事務の方が保護者と折衝してくれたりもします。困った学生が接触できるところが三つあるということですよ。だから引っかけはする。引っかけやすいが、奨学金が切れて生活費が無いというのに対してどうこうできる仕組みそのものはないので。対応できるケースと対応できないケースに分かれるかなと思います。

(B) 授業料の支払いを保留にして貰えるっていうことが、あんまり公式のルールじゃないのかなって思っている部分があって、実はこれ本当にいいのかわかってないから微妙なんですけど。二年生の秋学期になった時に半期分しか納めていなかった学生がいました。12月くらいに学科長を通して 150 万以上を残りの期間で納めないと卒業ができないことを担当教員にだけ共有されたケースがありました。会計課がおうちの方とやり取りをして、何月までにいくら、何月までにいくらって分割で支払う計画で、それが滞ると電話してくれました。卒業式の当日の朝に、全額が振り込まれてなんとかなりましたが、最後の最後まで本人はそれを知らなかった。卒業発表のときに納めていない部分があるから、卒業発表に名前が無い。その日までには間に合わないけど、卒業式までには大丈夫って、親に言われていたんです。親が消費者金融で借金をして、間に合わせたっていう話を聞いていますが、本人はなんにも知らないと思います。

(インタビュー) 生活全般の話っていうのはなかなか難しいかなと思っています。どうですか？

(A) 教員が学生の話は聞いていて。ゼミだからとか担任だからっていうのは関係なく、相談しやすい教員のところに学生さんが相談するようなことはありますね。できる、できないという部分はどうしても出てくるかなとは思いますが。

(インタビュー) 家族関係がこじれている学生がいて、親とうまくコミュニケーションが取れない中で、学業不振だったり出席がおぼつかなかったりっていうようなことになると。学校として、保護者に状況説明や保護者を通して大学に行くように働きかけをするべきじゃないかという話と、親との関係がこじれている学生の場合はむしろ追い詰められちゃうっていうようなことがあり得るのかなと。例えばそういうのを他の機関を通して何か対応しているとかあったりするものですか。

(C) 基本的にはメンタルでしんどい学生は相談室というところにカウンセラーが何人もいますので。学生たちは相談室で、日常的なカウンセリングをうけています。あとは担当の先生と話をしながら状況を確認しているケースもありますし、ケースによっては精神科ともつながっているのです。精神科に通院をさせて、教員も診察に同席するという場合もあります。医者と大学と学生の間で話をしながら、治療を続けながら、学生生活をどうするかというような対応をするケースもあります。

(インタビュー) 親、家族との接点を持ったりする場合はありますか。

(C) 家族とは面談をしたり、電話で相談したりすることもちろんあります。ケースバイケースです。家族と話ができるケースはするし、本人が望んでいなかったり、家族を巻き込むことで本人がしんどくなるケースだとそれはしないです。

(A) 通院同行をするといったときに、特に親御さんとの関係が不調なケースを想定しています。端的に言えば親御さんからクレームになってしまうとか、勝手に何させてくれるんだとか。メンタル系のクリニックってまだまだ誤解が生じやすいところもあるので。20歳を超えている、成人を超えている、18歳を超えているとはいえ、勝手に大学が動いてけしからんみたいなことにはなったりはしないんですかね？

(C) 基本的には学生本人が受診したいっていうから、これに紹介して付き添ったということなので、我々が行きなさいと言って行かせたりしたわけではないので。親御さんからそういう話があった場合は、ご本人がそういう意思を示されたので、紹介して一人じゃ不安だということなので、同行していますというのが基本です。親からクレームがつくというか、クレームがついても別にどうということはないので、あまり気にせずにいます。ただ一定期間入院が必要なケースや頻繁に不安定状態が高すぎて外に飛び出して大騒ぎしたりするような学生もいます。そうすると救急搬送されたりします。そうすると親のところには、当然連絡が行きます。そうすると逆に親御さんもびっくりするから。遠く離れて学生生活をしている子供の様子を大学と協力しながら見守らなくちゃみたい意識が変わっていく場合もあり、そうしてもらえように話はするので。いずれかの段階で保護者に学生を支える側に立ってもらいます。

(A)。今までで一番困ったのが、自分が明らかにおかしいと思っている症状があるのに、カウンセリングや病院に行くことを親にきつく止められていて、行こうとしたら叩かれるとか家から出してもらえなくなるっていう相談でした。どうしたらいいかというと、どうにもならないです。そんなことを言うてくる大学はやめなさいとか。そういうことになってしまっ。学校に通えなくなるから、親には言えないけど、病院行きたいみたいなケースです。こっそり行くわけにもいなくて、困ったことがあります。

(A) 事務方のバックアップがあるのは心強いなと思いますね。学生にとっても選択肢が3つあるということですけども、教員にとっても自分以外の選択肢が2つあるっていうところは、学生さんの対応をしてくときに手札があるっていう強さがある。余裕をもって対応できるっていうのはお話を伺っていて思いました。それが大学全体の雰囲気としてあるっていうのはいいなあとと思いますね。話を聞いているときに、どうコンセンサス取ればいいんだろうかというところは、頭の片隅にどんどん浮かんでくるので。組織的というよりは個別対応の応用編がいっぱいあるっていう感じなので、計算が立たないといいますか、この個別対応はどうしたらいいんだろうっていうところで、まず自分が悩まなければいけないというところがあります。枠組みがしっかりしてるというのは強みだなと思いますし。

(B) 進学って贅沢品なのか、それとも学生本人が自活して生きていくために必須の物なのかっていうところが今すごく難しいんじゃないかなと思っていて。生活保護を受けながら、その世帯で大学進学はできないけど、世帯分離をすると進学ができるっていうケースをうちの学校では取り扱ったことがあるのをちょっと知っていて。お金が無理だったら、辞めて自分で働いてから来なさいって思っている先生方も多いなとは思って。その感覚ってまだすごく強いかもしれないです。心身の状態も、いったんお休みして万全になって健康になって、通えるようになってから通いなさいという対応が今まですごく多かったです。それが大学の方針なのか、たまたま対応した人の上にいた人の方針なのかはなんとも言えないなと思っています。そのセクションを管轄する人によって変わるんじゃないかなって。それってすごい、不安定ですよ。大学の方針があるなら良いんですが、方針が贅沢品だから状況を整えてから来なさいに決まってしまうたら、私たちはもう動くこともできないだろうなって思っ。なんかグレーゾーンのままだも、いいかなっていう気も今はします。

(インタビュー) 全般的な傾向かはわかりませんが、大学進学に、社会的養護の経験がある子供たち、あるいは低所得世帯の子供たちに、(学費の) 無償化で進学の道が開けてきた中で、学力とセットだったりするとか、成績がある程度ないとその保証が付かない。アルバイトをしながら生活費をなんとか工面してってことと、成績の両立が難しかったり、家庭環境が複雑でサポートを受けられなくて学費を工面するのが難しいケースがここ数年で増えてきているような、印象はいかがですか。

(A) 社会的養護の部分に関しては、奨学金が幾分か給付型で出るようにはなってきましたが、劇的に進学率が上がっているのかといえば、児童養護施設から大学への進学率は20%程度なので。改善はしてきているけど、劇的なものではない。そして、社会的養護出身の学生のデータとして中退率が非常に高い。文科省調べで一般大学生が1.9%のところ17%であったりとか、データの取り方によっては27%であったりとか。データの取り方が一緒じ

やないので、単純な比較にはならないんですけれども、やはり中退率が高いというところが出てきています。社会的養護が関わってきた子供たち、学生さんであったとしても、措置解除をされてアフターケアが機能しなかったら実質社会的養護と繋がっていない若者ということになります。単純に社会的養護の出身か否かというところでは測れないかなと思っています。中退を防ぐためのチームというものはある程度必要なのかなと思いますし、そのスキームの応用が社会的養護経験のない学生さんたちにも活用できないのかな、というところが今後の大きな課題になっていくのではないかなと思っています。

親との関係の不調という部分で、例えば15コマの授業だったら5回欠席したら失格になってしまって、(単位認定)試験も受けられなくなってしまいます。必修科目で3回休んだら本人に連絡を直接取る。4回目になったら親御さんを含めた保証人であったりとか、お家の人に連絡をして、こういう状況なので心配ですってお声がけしてくださいというようなことをします。5回目で本当にアウトになってしまうので、その間までに学内で(該当の)学生を見つけたら声をかけに行くし、あの授業は、出てるはずだからってということだったら教室の前で待って声掛けに行くようなこともしつつ、親御さんにも連絡とってということをやっているんですね。それはどの学生にもやっています。計画的に休む学生もいるので、計画的なので大丈夫です、って言われて、親に連絡しないでくださいよ、とか言われちゃったりもするんだけど。その中で親御さんとの関係が不調であったりだとか、形だけ保証人が必要だから名前だけ貸してますよというようなケースの場合、連絡を取ることでより不調になってしまうということもあります。ルールとしては、連絡しましょうってなっているので、教員としてはジレンマに悩まされることもあります。学生さんと個人のコミュニケーションがとれていて、いろいろ事情がわかっているとしたら、直接学生さんに言うことでフォローはできます。増えているかどうかという質問に戻ってしまえば、体感的な部分では増えてきているんじゃないのかなという。いわゆるヘリコプターペアレントという、親御さんとしては良かれと思ってやっていることが、学生さんにとってはもうしんどいっていうことになっていたりすることもあると思います。大学の欠席数が増え、ご本人と面談したら、ヤングケアラー状態になっていたというのはあります。あとは精神的な不調を抱えている学生も増えていると思います。

(B) 明らかに増えていると思います。短大は2年で終わるので、2年だったらなんとか耐えられるかもしれないぞ、みたいなのが。資格ちゃんと取るところだったらそういう方向に進みたい人しか入ってこないと思うんですけど。短大はここ5年くらい、片親かつ、それが母親っていうケースが多くて、そういう学生の多くが冗談のような額の奨学金を借りているケース。本当に返せるのかっていうね。授業料が足りなくなっているっていうようなケースが、数として増えているというよりは、割合が増えているなという風を感じるケースが多いです。親も多分2年くらいだったらなんとかできるかなって思って。

親に連絡をすると、親は子供に言わないでくださいって言うし。子供も親に連絡したら辞めさせられちゃうから先生言わないでって。学校に来れないなら、辞めざる得ないよねって、話になった時に、私は勉強続けたいんですって。じゃあ学校来ればいいじゃんね。でもこんなだったら、お母さんに言わなきゃいけないなって脅している感じになって。蓋を開けてみたらその子はちょっと発達障害気味で、コントロールが全然できなくて、親も全然気が付いていなかった、というケースもあって。教員もどこまで口出ししていいかっていうのは、

義務教育でもないし、正直つらいところだなと思ってはいます。バランスが取れない学生やコントロールができない学生、さらにそれをコントロールできない親がちょっと増えてるという感覚はあります。

(C) 教員経験からして増えたというよりは、もともとそういう人たちがたくさんいたところで仕事をしてきたかなというのが、私自身の経験というところなのですけど。

ただ、大学全体としてはおそらくメンタルの課題を抱えていたり、発達の課題を抱えていたり。不登校経験をして、オルタナティブスクールを経て大学に来た学生の総数というか、割合というのは増えていると思います。あと児童養護施設の出身の学生さんは、出身情報が教員のところに来ないんです。どの学生がどういう出自ですよっていう情報は一切来ないので、私たちも知ることはできません。ただ、うちの大学は丁寧に学生たちと関わるんで、その中で大体の状況を把握していきます。そういう点でいくと、施設出身の学生はちょっと増えていると思います。積極的に大学進学をさせようというふうに施設の対応としてやっているところもいくつかあるので。そういう大学進学を後押しをしている児童養護施設から来る学生さんの数はやっぱり増えていると思います。今まで学年 1 人だったのが 3 人くらいになっているかな、という印象はありますけどね。

(インタビュー) 家族関係もありながら、経済的な問題に対して、学校が打つ手がなかなかないのかなと思いますが、そのあたりはいかがですか。

(B) お金の問題は、難しいですね。お金の余裕がないだったら休学しなさいって。お金が貯まったら復学しなさいって。何年までは休学できるという話はしますが、じゃあ休学期間どうやってお金を貯めたりするのかなっていう、アドバイスまではほとんどしていないと思っていいです。逆に本人から家にも帰れないし、どうしたらいいですか、って言われたときに、家賃の安いエリアとか、夜に傾きすぎないでできるお給料の高いお仕事とかなかなかないのって聞いたり、住み込みのところがいいかとかを一緒に探したっていう経験があります。住み込みのところを見つけて、でも結局戻ってくるほどは貯まらなくて。この仕事で生きていけるってわかったからやめますってなっちゃいました。家と関われない状態になっている学生に休学はさせるけど、その後どうしたらいいか、考えなさいって言うのは簡単ですが、すごく責任が重いから、おいそれと手を出せないことで。

(インタビュー) 学科としてとか、学校組織としての対応っていうのはほとんどないのかなと思います。

(B) そこまでは手を出すなっていう雰囲気があるような気がします。

(A) 休学のサジェストするときにしんどいなと思うのが、奨学金を借りている場合。奨学金は基本的に 4 年間分しか想定していないものが多いので、結局 1 年分奨学金なしでやらなきゃいけないって言ったら。余計苦しくなっちゃうだけで。やはり戻りづらくなってしまうというのはケースとしてありますし、ただの一回も失敗ができないというところは、矛盾を感じるというか。例えば意図的に一年休学をして、海外に留学するとか、調査をしっかりしないかっていうような学生さんと比較したときに、そういうチャンスすらも得られないのかっていうところはあります。しんどい学生さんだけでなく、前向きに学業に取り組んでいるけれど奨学金を借りてきている学生さんが半数近くいるので。これは新たな格

差になっていくのではないかと思います。どんな支援が必要なのかという話で言えば、社会的養護経験のケースに関しては、いかに社会的養護のアフターケアと連携をスムーズにするのかってところです。大学側も突然連絡が来ても個人情報なんて言えませんというところで終わってしまうだろうということが想定できます。そうであればそういったスキームを作っちゃいましょうっていうところで。作って連絡が取れるというか、事前に（事情が）わかっているケースに関しては、入学前からコミュニケーションを取るように、学生さんもしっかり間に入れて。施設であれば自立支援担当の職員も一緒に入れて、リービングケアやアフターケアと一緒にやっていきましょう、ということで取り組んでいます。コミュニケーションは取るようにはしています。それでも情報が来ないことがあります。当事者の方は、社会的養護のことを知らない人に一から説明するのはしんどいですね。まあ、先行研究でもいろいろ出てくるところなので、じゃあそこは僕がアドボカシーするよ、代弁するよ、っていう役割を担ってきました。これって社会的養護の子供たちだけじゃないだろうかと推察していて、家庭環境にしんどさを抱えている方。ギリギリの状態、生活保護や家庭で世帯分離をして進学してきている方、親との関係が悪い方やヤングケアラーの方。あらゆる人が一から説明するしんどさというものはきっとあるだろうと思うので、そこを代弁する、そういう機能が学内か学外か、どちらにせよあったほうがいいんじゃないかと思っています。

（インタビュー）大学生が家族を頼れないときに、その後ろ盾が生活困窮者支援団体であるとなると、大学側もピンとこないというところもある。

（B）学生がそういうところを利用して通学していることもなかなか想像されないことでもあるのかなと。特に私大だとよりお金がかかるから。そういうところの子は多分来ないだろうと思っています。

（インタビュー）学生の学業を続ける難しさの状況把握は一体どこに当たったらいいですか？

（B）大学全体の方針がそういう方向になっている大学は、どこかの窓口に行けばわかるところはわかると思います。

（C）メンタル系の学生の統計とか、情報は相当あります。障害学生系の状況とかニーズは把握する。そういう情報も多分沢山あると思います。整っている部分はありますが、今日の話の様なトータルとして学業継続の難しさを抱えている学生みたいなのをターゲットにして情報を集めることはやっていないし、どこでもやってないと思います。

だから今もしやるとすれば、ここにいらっしゃる先生方のようにある程度そういう対応の経験があったり、枠組みを作ろうとしていらっしゃるような先生から、まず話を聞くということでは最初の情報を集めるのは難しいと思います。結局、大学が組織として現状どこも対応できないわけですよ。だから情報も集められないし、窓口にもなれない。これをうまく機能させようと思ったら、大学の側にカレッジソーシャルワーカーみたいなものを仕組みとして持っているところがいくつかありますから、そういうところだと情報を取れると思うんですね。情報を聞くことと、それからやっぱりこの仕組みを進めていこうと思うと、大学側に窓口になるような専門職のカレッジソーシャルワーカーみたいなものを正規の職

務として配置していくみたいなのがないと多分進みませんよね。

(B) 学業継続が難しい理由とか、中退した理由を外部組織が聞いてしまうと、表向きは進路変更とか書いてくるけど、裏に違う事情があったというのは多分拾い上げることができなくて。進路変更の数だけであれば、その数でも十分いいっていうのであればこの数字は全部把握していると思いますが、そういうことじゃないだろうなと思ったので。それはすごく難しいところかな。

(インタビュー) 高校の先生も近い話をしていました。だから高校、大学、たぶん専門学校とかも含めて、現場でかかわった先生とかは言っていますが、数字としては出てこない。

(A) 中退理由に関しては、それこそ奨学金を借りてきている学生さんにとっては結構センシティブな問題ですよ。単純に学力不振ということになったら、奨学金を返さないというお達しが来る可能性があるんで、そうならない方向を考えなきゃいけない。

そうなったときに例えば精神的な疾患があるので続けられませんでした、っていうような合理的な理由をあえて出してくる可能性もあると思います。そして非常にバイアスのかかった中退理由が出てきます。例えば経済的困難が実際あったとしても、奨学金を借りてるのに、何故、経済的に困難ですかというようなところは、主たる理由にしづらいというのもあると思います。奨学金を親のパチンコで使い込んだっていうケースだときっと返せってことになっちゃう。社会的養護の方の調査ですが、児童養護施設出身学生の学生支援に関する調査というものを上田先生という方がされていて、これは2020年に取られています。この方は学生支援課学生部宛に調査票を郵送しています。全国の大学、国公立私立に全部お送りしていて。結局653校に郵送したうち、回収が131校。回収率20%です。これくらいを見込んで送ってみるかですね。

(インタビュー) さっきのお話の中で、通常家庭にいらっしゃる子に比べて、児童養護施設の人たちって、中退率が十倍くらいの数字だったと思うんですよね。その中でアフターフォローの話をされていて、施設を出た後のアフターフォローって結構充実しているのかなと思っていましたが、課題はどんなところですか？

(B) 国の調査が、結局その調査が行入りましたが、施設だとか里親さんを通じて今繋がっている人たちにこの調査票を出してくださいっていう調査実態です。繋がっていない人たちはもっといっぱいいます。3年たったら関係が継続できてないという割合、(正確な)数字をちょっと今すぐ思い出せませんが、かなりの割合であります。それはいろんな理由があって、児童養護施設などを僕がインタビュー調査した中でも、もう関わりたくないっていう方もいれば、施設の職員、里親さん双方忙しいから、今いる子供たちの支援の邪魔になりたくない。自分の困難な部分は相談したくない。里親さん出身の子でしたが、やっぱりいい姿を見せたいみたいな。だから困った姿を見せたくないという話をします。施設には感謝しているのだけれども、僕にとっては忘れたい歴史だという方もいらっしゃったりしました。だから良好じゃないから施設に相談できないというわけでもなく、本当に施設との関係が悪くて、もう会いたくないというのもある。プラスして北海道特有の課題として広い訳ですよ。道東方面の施設に入所していた子が、北海道はどうしても進学先が札幌圏に集中しており、みんな移動してくるわけです。今の生活で何か困りましたっていったときに、アフター

ケアで出身施設に頼りましようとなっても、そこに行くのに何時間もかかるってなったら丁寧なケアがやりたくてもできないというようなものもあるし。

札幌の地域資源がわからなかったら助言のしようもないという。(例えば)我々が釧路に何がありますかって聞かれても、和商市場くらいの感覚で。支援をしようとしても何もできない。やっぱり自分で何とかしなきゃってなる。措置延長という制度はありますが、(利用割合の調査を)北海道でとっているのかな、わからないですけれども。僕が出会っている当事者たちは少なくとも、もう施設を出たいと。だから、国は今年の4月からの改正で自立援助ホームを長く使えるようにするだとか、出戻りオッケーにするという枠は作っていますが、僕が出会っている当事者たちはどう考えても利用しないだろうなと思います。早く施設から出て自由になりたい、一人暮らしをしたいっていうニーズのある子たちが、施設を継続しましょうとか。大人の感覚で行けばそのほうがいいに決まっていますが、フォローも充実するし。でも当事者になったらやっぱり一人暮らしをしたいよ、とか。今からまた新しい施設に行くのは嫌ですよっていう。そこでまたゼロから関係作るなんてすごく嫌です、ということになる方との出会いのほうが僕は多いので今の枠組みって当事者ニーズを汲んでいるのかなというところは幾分疑問に思っています。枠として聞こえはいいんですけれども。どれだけ利用するのかなというところは疑問で。結局当事者が一人で頑張らなきゃいけない。その中で、知らない人には相談したくない。なぜならゼロからなんで自分が施設に入所することになったのかというトラウマから話さなきゃいけないというのは、非常に心理的な負担も大きいので。多分正直に話さないんだだろうな。知ってる人間がいたら話してくれる。知らない人には多分適当に、いいストーリーで話をしていつて、そうしたら辻褄が合わなくなって、この子嘘をついてるんじゃないという風に大人側は思ってしまうっていう。負のスパイラルになってしまうんじゃないかなというところは、非常に心配しているところなので、冒頭で(話したように)社会的養護だから大丈夫だよね、ということにはならない。そこで対立を発生させちゃいけないという風に思うところです。

(B) 情報だけ機械的にアクセスができて、人間じゃないものに相談ができるというか、頼ることができる情報ソースとか情報源みたいなものがあったら、もしかしたらアクセスもしやすくなるのかもしれない。背景が施設の出身とかじゃなくて、家とトラブってるだけの学生とかでも、事情を説明しなきゃいけないという感覚って多分同じだと思って。そういう情報にアクセスする方法を大学に繋がるように置くことができたらと思います。

(A) 被援助指向性っていうのかな、受援力の部分をずっと調べてたんですけども。高校生を対象に困りごとがあるときに誰に相談するかっていうものを複数回答で尋ねた結果、面識のない SNS 上の知り合いって答えた人が約2割を占めたというような(結果がありました)。要は日常生活の中で誰かに相談すると、様々な不利益や心理的葛藤が生じるので、知らない人のほうが気楽に話せるというものは、やはり一定数あって。この層が今度は闇バイトであったり、性的搾取であったりとかっていう部分に繋がる可能性もあるっていうこともすごいリスクだなという風には思いますね。そして生成 AI が学生さんの中で非常に身近になってきているので、あれがどう作用していくのかっていうのは、今後新しい研究になっていくんじゃないのかな。SNS とはまた違う、第三、第四の選択肢に生成 AI がなっていくんだろうと思うので。

(B)最近のCMが悪いですね。AIだったらもっと答えてくれるんじゃないかと思って、結構うのみにするリスクはいつも見て思ってた。学生には言っていますが、あれが本当に一般的なものだと思うちゃったら、もしかしたらそれを使うのかもしれないし。ちゃんとしたデータベースにのみ繋がっていればいいのになって思います。誤情報も全部取り込んでやって答えてくるから怖いですね。

(A)否定的な結果を懸念するよりも、肯定的な結果が得られることを十分認識していないために相談しないという部分があります。困難を抱えている学生さんと相談をしたときに、どういうポジティブなものがあるのかということを、情報として発信していかないとダメなんだろうなという風には思います。困難を抱えている学生、若者であればあるほど相談は簡単じゃないということで。社会的養護の子供たちなんかは経験の過酷さから声を奪われた状態で、今生活しているので、相談に対する不安感しかないっていう。負の経験をしてきていたら、大人に相談するっていうところが困難になる。これは年齢関係ないと思うんですよ。成人になったから相談しやすくなるということにはならないと思うので。そういった経験があって、どうせ相談してもっていう風になったら、急に、欠席が多いけど、どうしたのって言ったら、いや実は、という風に言われても、我々教員も手立てがなくて苦しくなるっていうのはあるかもしれない。

(B)あそこに相談してよかったとか、解決したっていう話をどこかから聞いていけば、じゃあ私もそうなるのかなって思うけど、そういう話自体も共有しないから。大っぴらには言えない。その情報って繋がっていかないんでしょうね。

(A)抱えている困難が、生活面のことに偏りがあると思うので。お金のことや、アルバイトのことであったりとか、そうすると大学としての支援が難しくなってくることが多くて。キャンパスソーシャルワーカーをしっかりと置いておいて、生活のことは地域の中に相談する場があるわけだから、そこがしっかりイニシアチブを取って、そこが大学とスムーズに連携が取れる仕組みを作っていないといけない。どこかだけが頑張るっていうのはやっぱりもう上手く機能しないと思います。ただ、まだキャンパスソーシャルワーカーを置いてる大学って道内にどれくらいあるのかわからないですけど、少なくともうちにはいないので。そうじゃない障害を抱えているとか、精神疾患を抱えていてという風になるのであれば、シンプルに障害者の相談事業所がいろいろ地域の窓口になれるはずなんですよ。ソーシャルワーカーと大学がどう連携しようかというところだけ解決したら、きっとある程度スムーズになっていく。生活困難を抱えている学生さんであれば、生活困窮者の支援をしているところがもうすでに地域にあるわけだから、そこがイニシアチブを取っていけたら、そこと大学がどう連携するのか、接続する場所を整えることができれば。要はエンパワーメントを高めた状態で、学生さん本人が描いた学生生活ができるんじゃないのかなと。

(インタビュー) 経済的問題だったりすると、途端に(解決策が)なくなるんですよ。そこは、大学生も困窮する場合があるんだっていう認識を世間全体で持っているかっていうか。引っかかっているところですね。

(B)父親と父子家庭の子で、父親には言えないみたいな。最終的には父親に払ってもらったんだけど、滞納の件をなんとかしたいけど、どうしたらいいか訊かれて、私の手に負えないのでソーシャルワーカーのいるところに行っただけですよ。

そこで法律事務所紹介していただいて。どういう手段をとって、どこに行けば何の相談に乗ってもらえるとか全部紹介してもらって。少し時間がかかるから、やっぱりお父さんに言わなきゃいけない。後でちゃんと補填するからって。お父さんに言えないかっていうのを二、三か月やって。お父さんに一時的に立て替えてもらって、そのあと弁護士に入ってもらってお給料払ってもらった分でちゃんと埋めたっていうのはあって。他にブラックバイトに引かかって辞められなくなって、鬼の LINE で心を病みそうだからどうしたらいいですかっていうケースも、そっちの方でもお世話になって。しかるべき相談窓口を教えてもらって、親にも話して解決したケースはあります。あそこに行けばブラックバイトのことを解消してもらえっていう噂が学生には広がって。ただなんでも相談できるから相談しに行く子はメンタルの子が多いです。私もメンタルだって思われるのは、嫌だから堂々といけないからなんとかしてくれって言われて。電話かけて一人の時間に行って。学内に相談できる場所があるというのは違うなというのは思います。今のケースで親が機能しなかったら、終わってたと思います。まだまだ事情を話したから授業料の支払いを待ってくれるわけではないと思います。でも、待てるのだったら、待てる体制にしてほしいとは思いますがね。でも難しいですね。

(A) 大学で学びたいと言っている人の学費をなんとかかからないようにできないのかという経済的な部分が解決したら、表に出てくるのが親問題になると思います。このあたりの教育の機会を奪われている。

4. 報告会の開催

○タイトル

「親を頼れない若者の住まいの支援について」

○日時

2025 年 3 月 4 日（火） 13 時 30 分～16 時 30 分

○開催方法

YouTube 配信

<https://www.youtube.com/watch?v=-nntLOAeRzM>



配信先 QR コード

○視聴人数

153 名

○開催概要

親を頼れない若者の支援を先進的に取り組んでいる、認定 NPO 法人トナリビト、NPO 法人釜ヶ崎支援機構の方を講師としてお招きし、活動紹介をして頂くと共に、ユースサポートハウス事業や検証会議の報告を行います。また、若者期における親の役割について考えていきます。

○プログラム

1. トナリビトの活動について（13:35～14:25）

講師：認定 NPO 法人トナリビト 代表理事 山下 祈恵 氏

2. 認定 NPO 法人釜ヶ崎支援機構の活動について（14:25～15:15）

講師：認定 NPO 法人釜ヶ崎支援機構 理事・事務局長補佐 松本 裕文 氏

3. 検証会議報告（15:15～15:35）

報告者：検証会議 座長 山内 太郎 氏

4. 若者期における親の役割とは？（15:45～16:30）

【登壇者】

認定 NPO 法人トナリビト 代表理事 山下 祈恵 氏

NPO 法人釜ヶ崎支援機構 理事・事務局長補佐 松本 裕文 氏

さっぽろ若者サポートステーション 山名 徹 氏

NPO 法人 CAN 屋代 通子 氏

NPO 法人コミュニティワーク研究実践センター 湯澤 真吾

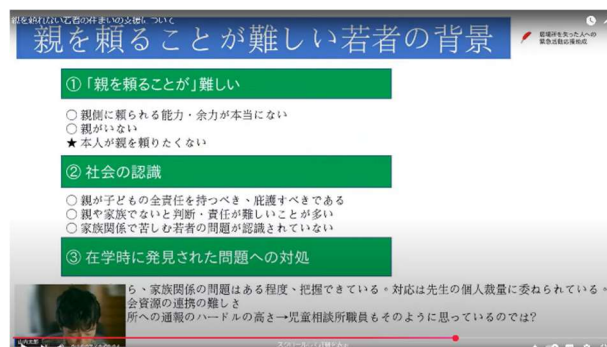
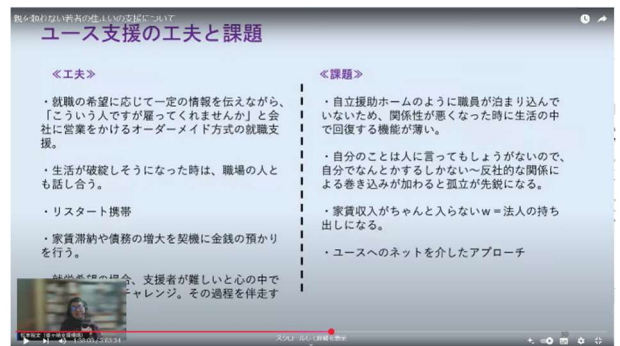
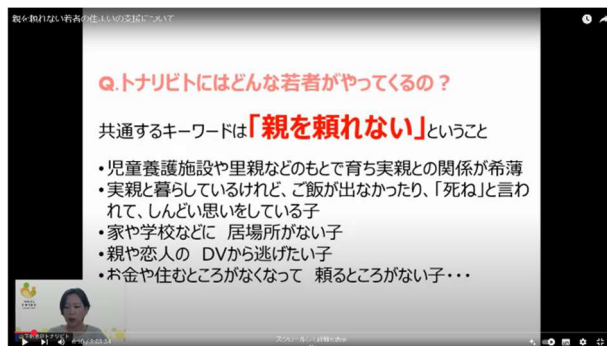
【コーディネーター】

検証会議座長 山内 太郎 氏

○内容

山下氏から、認定 NPO トナリビトの活動を始めた背景とこれまでの活動についての報告があった。また、子どもたちの置かれている状況について社会の都合や親の状況により、スタートラインに大きな開きがあり、その差を埋めるのが福祉や社会保障の役割ではないかとあった。また、親の機能の社会化について、本来、社会が果たせていないことを「親の役割」として押し付けてきただけではないか？若者たちの困りごとを見過ごした結果、現在のような状況が生まれているとあった。松本氏からは、NPO 法人釜ヶ崎支援機構の釜ヶ崎におけるホームレス支援の活動について説明があったあと、ユースの居住支援について取り組むきっかけや取り組み状況について説明があった。また、居場所事業についても説明があり、当初は若者層を想定していたが、近隣の小学生や親子での利用もあるなど、求められる機能が広がっていることや地域に開かれた公共的な家族空間のようになりつつあるとあった。検証会議報告では、本事業での取り組んできた内容についての説明やヒアリングの内容、若者期の親の役割について説明があった。パネルディスカッションでは、親側のサポートや親のマイナス面だけではなくプラスの面にも目を向ける必要や、家族に何でも押し付けるのではなく、難しい部分は地域や社会がサポートしていく必要がある。また、美味しい夜ご飯を提供してくれる子ども食堂があるから、子ども食堂に通うきっかけになり、結果、親とは違う大人が関わり、家族の中に縁側のような余裕が生まれ、親と子供の関係性の安定化につながるのではないかとあった。

○写真



5. 提言

(1) 親を頼ることが難しい若者の背景

①親を頼ることが難しいとは？

○貧困や精神疾患等、孤立を背景に、若者を支えるだけの余力が親側に無い

○虐待やネグレクト、過干渉などにより、親との関係を断つために避難してきた若者

親を頼ることが難しい若者は大きくは、2つに分類される。若者の出身世帯そのものに、若者を支えることが難しい世帯。もう一つは、虐待・ネグレクト・過干渉などにより、家族との関係を断つことを希望している若者である。前者は、家族関係が悪いケースもあるが、比較的關係が良好な場合もある。一方で、若者自身が関係を断つことを選択し、家を飛び出した場合は、支援開始時には関係回復を望んでいない若者も多く、若者の心情を理解し、若者の意志を尊重した関りが非常に重要になる。

②社会の認識

○親が子どもの全責任を持つべき、庇護すべきであるという家族主義的な社会

○親や家族でなければ判断や責任を難しいことが多い

○家族関係で苦しむ若者の問題が認識されていない

社会側の認識として、家族関係は良好で、家族に対して家族が全責任を持つという、家族主義的な主観が社会側に根強くある。そのため、親を頼ることが難しい若者の心情を理解するためには、「家族とは必ずしも良好な関係」ばかりではないことを前提に、考えていく必要がある。

③在学時に発見された問題への対応

○在学時から、家族関係の問題はある程度、把握できている。対応は先生の個人裁量に委ねられている。

○学校と社会資源の連携の難しさ

○児童相談所への通報のハードルの高さ

子どもから若者に成長するに当たって、多くの若者は高校や大学・専門学校に進学する。家族関係が悪い若者の問題は、在学時には発見されていることも多いことが今回のヒアリング調査でわかった。しかしながら、家族関係への対応は、学校の範疇を超えることも多いことや学校の中だけでは、アプローチが難しい場面も多く、先生個人の裁量に委ねられていることが多い。また、児童相談所への通報は、学校としてもハードルが高いことや児童相談所が介入することで増々、家族関係が悪化することが予見されるため、通報をためらうケースも多いことがわかった。

(2) 若者期における「親の役割」とそれを社会化するためには？

【親の役割】

①若者にとっての最後の砦（社会側からの期待も含む）

- 経済的な援助や保証
- 社会的な手続き等の援助
- 子どもへの責任
- 帰省場所の提供

②良き相談相手であり助言者

③若者期の「育ち」・「成長」の援助

【若者期における「親の役割」を社会化するには？】

「親の役割」を社会化することについて、本事業では考えてきた。相談に来る若者の多くも「親」との関係に苦しむ若者がほとんどであった。しかしながら、「親」への愛着を持っている若者も非常に多く、若者期の「親」とは、子ども期の関係性の延長線上に存在し、「親」を頼ることが難しい若者は、子ども期から親との関係は不安定なものとなっていた。

核家族化が進み、孤立が顕在化してきている現在においても、「家族」が担う役割やその期待が、大家族が一般的であった時代と変わらないことから、家族の負担は以前より大きいものになっている。そのため、「親の役割を社会化」することを考えた時、若者だけではなく「親」へのサポートが非常に重要である。一方で、長い時間を家族として過ごし、親を頼ることが難しいと結論を出した若者にとっては、「親も困っている」という理屈としては理解できるが、それを前提にすると、家族関係で苦しむ若者としては頼る場所を失ってしまう。そのため、支援現場では「親」を頼ることを前提としないアプローチが必要になる。

子供期と若者期では、親の関りや周囲からの期待されることは大きく異なるが、基本的には「最後の砦」という部分は変わらない。そのため、親を頼ることが難しい若者は、最後の砦を失ったまま、自ら育ち、成長していくことを余儀なくされる。また、育ちや成長の過程で、相談できる相手がなくなる。

「最後の砦」と表現された部分が「若者期における親の役割」と仮定し、それらを細分化し、社会で全てを担うという非常に難しく、事業として担うこともまた難しいと考える。しかしながら、①相談できる人をセットにした暮らしの場・帰れる場 ②雑談などから相談できる場所 ③食事提供や体験事業などもあるような居場所 等、地域の中に若者が利用可能なメニューが複数ありかつ、若者自身が選択できることで、自身が信頼できる大人に相談しながら、育ちや成長の助長につながっていくものとする。

生まれた環境や親の経済状況等に左右されない、みんなが同じスタートラインに立てる環境整備を行政が主体となり行うべきである。親に頼ることが出来ないことで、学びや安心した暮らしを奪われる若者がいる。若者期は将来に向けて迷い、試行錯誤を繰り返しながらゆっくりと考える時間が必要である。そのため、若者に対して学費の無償化、最低限度の生活を支えるとは異なる観点での家賃や生活費の援助など経済的支援も重要である。



【発行】

特定非営利活動法人コミュニティワーク研究実践センター

〒064-0808

札幌市中央区南 8 条西 2 丁目 5-74 市民活動プラザ星園

TEL : 011-511-1315

HP : <https://cmtwork.net/>

【制作】

検証会議委員